Society of Japan Science Teaching

B1－09

日本理科教育学会

「理科指導壱百回」に見られる女教師

中村　敏弘
NAKAMURA　Toshihiro
宮城教育大学授業分析センター

授業研究　授業分析　理科教育　教育方法　授業技術

1．はじめに

「理科指導壱百回」(1931/5)には，大正7年(1918)から昭和6年(1931)にいたるまでの13年間に行われた理科等の研究授業の記録が載せられている。その記録は詳細な逐語記録なので，授業の進行や展開を知ることができる。さらに授業後にもたれた検討会の記録もあり，授業の評価や，授業研究のレベルなどを知ることができる。理科94回の中で，女教師が教授者であった回が，2回ある。少なくて調べやすく，また特別な事例なので，「理科教育研究会」の授業研究の状況が掴めると考えた。

2．女教師石田はな（日本橋区久松尋小）の授業

女教師が教授者であったのは，次の2回である。女性であることは，名前から判断した。

第3回　谷　みね　大正07/05/25　東京・錦華尋小・6女「鮒」
第53回　石田はな　大正11/11/25　東京・久松尋小・6女「磁石」

このうち，石田の場合について見る。

東京・日本橋区久松尋小は，第1回の実地授業研究会を持って以来，5,26,36,53,68,98と7回もやっていて，飛び抜けて多い。次は4回が1校あるのみで，あとは3回2校，2回が6校である。

校長は堀江嘉吉，「理科教育研究会」発足時(1918)の常任幹事で，しかも昭和4,5年(1930)ころも幹事で，同校の校長であった。そうだとすれば12年間も同じ学校の校長だったことになる。理科教育研究会にはきわめて熱心だったと思われる。たとえば，出席者の名前が記録されている第15回までの実地授業研究会の出席回数は14回で，それは皆出席の林会長に次いでおり，14回は他に川本宇之介がいるだけである。堀七蔵によれば“最も重要なる人……理科教育研究会に尽くせる功績顕著なる人”[1]であった。

実地授業研究会で授業をするということは，たいへんなことであったと思われるが，その教授者の人選がどのように行われたのか，想像するしかない。中には，自ら希望して行った者もいた。このことは，その旨が「理科指導壱百回」に記されている。石田の場合は，校長が研究会の中枢にあって，熱心に活動し，学校もまた，何回もやっていたということによると推測される。しかし，彼女がやることになったのは，それだけではないと思われる。それは，彼女の授業が示している。

石田の授業は第6学年女2組(58名)で行われ，「磁石」であった。

教授案によると[2]　（注　他の引用もすべて　[2]に同じ）

1.要旨　鉄を引くこと及び南北を指すことに就いて教う

4.教授要項

1 鉄を引く　両極において鉄を引く力強し

2 磁石針は略南北の方向を取る

3 磁石の両極はその性質を異にする

とあり，今日から見ても妥当なものである。授業は，問答式で実験をしながら，行われた。予定は45分間であったが，実際の授業は80分掛かったようだ。したがって記録はこの本で2段組12ページ余もある。読んでみて，かなりおもしろい。授業中に笑いが何回か起こっている。

3．授業後の批評

授業後，批評会があった。はじめに会長より“……教授の説明を”と言われて石田は発言するが“誠に下手な授業を御覧入れました。…何卒みなさんの充分の御批評を願います”と言葉少なく，型通りである。

このあと6名の批評者による批評がある。それによると，まずほめている。（1番　誠に感服…一言にして言えば，老練……／2番　大変に結構な教授……／4番　結構な授業であった……／6番　今日の教授者は確かに成功したものであります。前からかなり見ました教授中善い授業と喜ばしく拝見致しました。）

しかし，こう賛辞を呈しておきながら，教授者が女性であることを特に付け加える。すなはち　（女の先生の御授業として今日の如く結構であったのは少なかった……(2番)／女の先生の教授としては可い方であったが……(3番)）といったぐあいである。これは，さらに学習者にも及んでいる。すなはち　（女の授業としては成功しているともうされましょう，あれが女の授業として自然でありましょう。(6番)／……子供の頭を練るとして考え女子の特質より考えて見れば……(3番)）とある。

時間超過を問題にしているのは視学(3番)だけで，他はたとえば“教授者が教授力の美点を有するために子供が能く続いた”と賞め，林会長にいたっては，嫌かせずに超過してやれたのは老練なることの証明だと，むしろ高く評価している。

重要なのは批評者は教授法（近来の教授思潮）にこだわり，石田のやり方は“方法を指導して結果を見出さしめ教師の予想と合えば教授を進めて行くという形”で“学習し易く教授し易い形”だが科学的能力陶冶に問題がある(4番)とし“考案する態度発見的態度に充分なるご注意を願いたい”(6番)という批判である。

引用文献　1）堀七蔵「日本の理科教育史」第二　p548
2）堀七蔵他「理科指導壱百回」下　pp699～

NII-Electronic Library Service